５つの森林活動

みなさまの参加を
お待ちしております

小手澤の森

第１・３日曜日

知足の森

第１・３日曜日

相模湖・嵐山の森
小原本陣の森
草莽荘の森
不定期活動

News Letter

NPO法人緑のダム北相模
midorinodam.jp

No.525-526
中学生が枝打ちに初挑戦しました

【定例活動報告】
小手澤の森（仮称）

第１日曜日の活動より

11月になったがまだ気温は高い日が続く。今日は宮村さんの組織する中学生から大学生の学生さん達が15名位山に入られた。来週、14日にSSH(スーパーサイエンスハイスクール）高等学校において先進的な理数教育の実施を目的にした制度だが、普段から緑のダムで活動するベテランの学生たちに当日サポートをお願いすることもある為、技術の振り返りとしての「枝打ち」作業をムカデ梯子を安全にこなすための練習を兼ねた作業を行った。

緑のダム北相模は相模原市内で活動する森林ボランティアです。急がず、無理せず、楽しく、休まず、 ボチボチと・・。

場所は、長福寺さん所有の小原観音像裏の中央高速沿いの、急勾配のヒノキ林である。整備の遅れた森林であるが全くの手つかずでもなさそうだ。

学生たちは、2班の別れ素早くムカデ梯子をセットし一番上のその上に足を掛けシャーシャーと平気な顔で枝打ちするのは女生徒たちであったが、男性徒達はヒノキの下で何かと注意する役割をしているので、男性徒全員がムカデ梯子に登ぼったところで終了時間になる事態もあったが次回のSSHの準備は終了した。

長くムカデ梯子を使っていないこともあり、この様な事の無いよう年間計画の中で機材の使用体験を行う必要を感じた一日であった。

第３日曜日の活動より

14日、SSHスーパーサイエンスハイスクールで東海大高輪台高校の生徒たちが二台の大型バスで「小原の郷」駐車場にコロナ対策配置乗車で５０名ほど到着された。２班に分けて先週下見をした小原観音像裏のヒノキ林に入っていった。私は1班を担当し先週の大学生3名がサポートについてくれた。
本日の森林実習は[1]ヒノキの間伐作業[2]樹木の測量実習である。2班が75分づつ交代してそれぞれが[1][2]を受講することとした。間伐実習では更に3班に分けて間伐を行ったが、かなりの急勾配の斜面での作業であったため生徒さん達も相当大変だったに違いない。
一方、樹木測量は元日大生物資源科学部森林資源科学科で教授をされていた桜井先生と宮村先生が担当され測量機器と分度器で樹高・胸高直径などを測り記録した。昼食を先週枝打ちしたヒノキ林の下で輪になって摂った。樹木林の下草に住む虫などの生物を採取したり、折れた枝で杖を作って遊んだ。今日のお土産として、間伐材で作ったコースターを楽しそうに大事に持ち帰っていた。

15日は永井さんのお花畑の底の竹林の折れて折り重なった竹の整備を行った。リーダは森林プロの二藤君（緑のダムOB)による竹と杉の混合倒木の整備である。竹が爆ぜ怪我の無いように作業するための作業順を決めるのは二藤君だ「段取り8割」の精神で作業していますという言葉が今でも耳に残る。

小林　照夫（本会、理事）

【定例活動報告】知足の森

第１日曜日の活動より

今回は、小林さんの記事にもありますように、枝打ちに初めて挑戦した。まず午前中は、知足の森の広葉樹林部分で除伐の作業を行なった。参加し出して半年程度経った中学生ではあるが、まだまだ基本的な身のこなしや枝払いの処理など経験値が足りないことは明白で、まずはその経験値を。そんなことを考えながら作業を始めると中学からずっと通っている大学生が大きな声でスズメバチが、と発見。近づいてみるとコナラの幹を数匹のオオスズメバチがかじっている。観察しているとどこからか来た１匹がこちらをホバリングしながら観察、いや、威嚇してきて、速攻避難。こういうことにすぐ気づくのはさすがは経験のある大学生。知らずに中学生が作業をしていたら大惨事だったかもしれない。そんなこんなで午前の作業をこなし、いよいよ午後からは枝打ち。枝打ちとは何か、から始めていよいよ梯子に。続きはぜひ中学生の報告で。

宮村　連理（本会、副理事長）

桜井尚武の森のコラム

「シロダモ（*Neolitsea sericea*）」

図1 シロダモ

20190310小石川植物園

図2 シロダモ新芽

20100416新林公園藤沢

図3 雌花と果実

20091110藤沢日大演

図4 林床のパゴダ風稚樹

20191109長渕山青梅

図5 シロダモの幹

20190310小石川植物園

東北地方南部から九州、沖縄、朝鮮半島、中国までの暖地の丘陵帯から山地帯に生育するクスノキ科の常緑高木。葉は楕円形で互生し全縁、三行脈と名付けている主脈と2本の側脈が目立ち、光沢のある葉面の裏側は白色を呈します（図1）。新芽は白色または黄褐色の絹毛に覆われて目立ちます（図2）。クスノキに似て3行脈が明瞭なので見分けるのは容易ですが葉を揉んでもクスノキのような強い芳香は感じられません。

雌雄異株で花は10月～11月の晩秋に咲き、翌年の同じ頃赤い大きく丸い実をつけるので雌株では花と実が同時に見られる場合がよくあります（図3）。庇陰下でも中々枯れず年々輪生する葉を重ねたパゴダツリー(pagoda tree; 仏塔状樹)の形態を示す稚樹をよく見かけます（図4）。図4のパゴダは5層の葉の屋根を持っていますから、一層1年と考えれば5年生の稚樹で葉は5年間も落ちずに着いているのだと考えられます。そうならば葉の寿命は案外長いのですね。

樹高15m直径50cmにもなる（図5）ので大きな材は広く利用されたようです。建築や器具、家具に使われたという記述があります。材は柔らかいという記述がありますが、槌の柄に使われたという紹介もあって様々な用途に供されたようです。

シロダモという名の起源はクスノキ科のタブノキのタブから来ているという説がありました。

桜井　尚武（本会、会員）

※前回のNo523-524の「ニシキギ」の記事の図1の説明の「シャリンバイ 20200116汐入公園」は「葉と翼 20181016新橋駅周辺の植え込み」の誤りです。お詫びして訂正します。

【若者の森づくり】ForesTo Class

今回の第３日曜日の定例活動は参加者が大人と大学生という事で、大人たちにしかできない危険を伴う風倒木の処理をさせてもらいました。

風倒木と言っても倒れた桧などの木だけでなく、曲がってしなった竹もかなり混雑しており木と竹が絡み合うなかなか複雑な場所で、伐って倒す順番を間違えると大事故も起こり得る危険度の高い場所でした。

現場の状態としては、竹林の隣や上に立っていただろう雑木や桧が倒れて竹林に覆い被さっている状態だったので、その大きな風倒木を処理するためにも下敷きになっている竹林から処理を行い、倒せれるスペースを作ってから風倒木の桧を倒すという手順で作業を行いました。

実際に作業をしてみると案の定、しなっている竹はノコギリで切れ目を入れている途中の時点から裂ける事が多々あり、周りの作業を見ていた自分としてはヒヤッとした部分もありましたが、特に事故もなく終えれて本当に良かったなと。

自分がいる林業の世界でも事故が１番多いのがこの風倒木処理という仕事で、それだけ難易度も危険度も高いという事です。

曲がっていたり複雑に絡み合っていると、どこに力がかかっているのか、伐ったらどうなる事が想定されるか、その後の退避場所は、どの木から倒せば良いのかなど、より状態を見極める力が必要とされます。

ボランティアではそういう状況判断をできる人材が少なく、また狭い場所に大人数が入ってそれぞれが自分の思うがままに作業する事も多いので、それだけ何十倍も怪我や事故が起きるリスクも高まっています。

だからこそ普段より危険を伴う作業の際は、より一層、事前の作業手順の確認、作業中は作業者同士で密なコミュニケーションを取りながら作業を行う、そして無理をしないという事を心がけれたらと思います。

二藤　政毅（ForesTo Class）

【若者の森づくり】知足の森

今回の活動では、初めての枝打ちをした。枝打ちでは、ムカデはしごを2つから3つ使って組み立てて、もし足をすべらせた場合でも安全なようにベルトをつけたりする。全てが初体験だったのでとてもワクワクした。枝打ちの作業はとても高い場所で行う。

私は小さい頃にジャングルジムで遊んだり、低く枝分かれがたくさんある木で木登りをしたりしていたので高いところに行くのは好きだった。だから、今回の作業はとても楽しみだった。でも、枝打ちは、ジャングルジムや低く枝分かれした木をのぼることとは全く違っていた。

足場がとても少なく、また、ムカデはしごは完全に木に固定されているわけではないので、カタカタ揺れる場合もあった。さらに、今までは体験したことのない高さまで行き、その中で枝を切るために手を離すので思っていたより、少し怖かった。

でも、ただ楽しんでいただけのジャングルジムや木登りとは違って、「自分の作業によってキレイな木が生み出せる。」、「役に立っている。」と考えると怖い気持ちより、嬉しさが上回った。

そして、「もっと枝打ちをしたい！」という気持ちがどんどんとわいてきた。下に降りてきて、自分の手入れした木を見上げると、一本の柱のようにまっすぐに伸びた美しい姿が目に入り、何とも言えない達成感に包まれた。

飯室　智春（GREEN TECH ENGINEER LAB　中学１年）

【活動報告】

東海大SSH受け入れを実施しました

今年度はコロナ禍のなか、受け入れが難しい状況ではありましたが、なんとか実施することができました。2010年より受け入れを開始し、今年で実は10年目の活動になっています。学校側でもスーパーサイエンスハイスクール事業での様々な見学や体験がキャンセルする中、バスを通常の２台にして密を防ぐなどの対応をとっていただきながらの実施となりました。野外での活動は、どちらかというと実施しやすいため、今回の実施となりました。

まず私の方で、これも例年通りですが、高校に出向き事前授業を実施しました。例年２時間のところ、１時間で収めないといけないという制約はありましたが、コンパクトに話をまとめて、森の問題点と実際に森に入って活動するときの考え方やポイントをお伝えしました。

当日は、道路の渋滞も大したことがなく無事に時間通りに到着。４０名近くを４グループに分け、２グループずつ、測量＋植生調査と間伐チーム（はさらに４チームに分割）で、午前午後クロスで対応するパターンとしました。昨年からの活動地ではあるものの、まだ境界線が未知な部分もあり、これはこれで測量体験でもあり、実際の活動に必要なことでもあり、で実施しました。当日にGPSを失念してしまったため、後日、測量終了地点で測位したものの、ちょっと誤差とは思えない違いがあるため、これは後日の検討事項としました。

宮村　連理（本会、副理事長）

【若者の森づくり】

GREEN TECH ENGINEER LAB

本会と協働する東京学芸大EXPLAYGROUND推進機構のラボの一つであるGREEN TECH ENGINEER LABと間伐材の活用を進めています。現在の中学生の主体が学芸大の附属中学校の生徒ということもあり、同じキャンパスにある施設で間伐材の利用を進めています。今月の活動を写真とともにご紹介します。

＜上段＞すのこ１号機は中学校に「納入」、それに伴い、学校側から頂戴したご意見を採用した２号機の仮組みまで作業が進んでいます。

＜中段左＞小手澤の森のゆずを収穫させてもらって、生徒がゆずジャムにしてラボメンバーに配ってくれました。

＜中段右、下段＞間伐材の板、２枚を木ダボでつないだ天板を使ったベンチ３脚も無事に組み上がりました。現在最後の表面仕上げと、抜けた節の穴を埋める作業をしています。大学図書館に「納入」、活用されます。

【事務局から】

19日から環境省主催のエコライフフェア2020オンライン（http://ecolifefair.env.go.jp）に学芸大のEXPLAYGROUND推進機構に協力する形で、出展します。バーチャルブースという団体ごとのページに本会で活動する中高生が作成したビデオがアップされる予定です。

高校生が作成したビデオは関係するみなさんのインタビューをつないで、森での活動の魅力がわかるように製作されています。本会の相模湖の森、大学の東久留米の森、さらにこれらの間伐材を大学のCLTでできた研究棟で加工している様子などがまとめられています。

さらに、中学生が制作したビデオは中学生らしい視点で編集されたビデオになっています。ぜひバーチャルブースを訪れてみてください。

NPO法人
緑のダム北相模

名称：特定非営利活動法人　緑のダム北相模
現地事務局：〒252-0172　相模原市緑区与瀬本町12　かどや食堂内
支援団体：セブン-イレブン記念財団
積水ハウスマッチングプログラム、国土緑化推進機構
コンサベーション・アライアンス・ジャパン
協働団体：神奈川県、相模原市、麻布大学、マルモ出版、
東京学芸大学環境教育研究センター、
（社）東京学芸大EXPLAYGROUND推進機構、
（社）さがみ湖 森・モノづくり研究所、ウッドバンク㈱

参加にあたって：

初参加者は、9時15分までにJR相模湖駅前に集合です。服装、持ち物については、汚れても良い服装、着替え、滑らない靴　成るべく皮製手袋、万一の怪我に備えて保険証、飲料水、主食、昼食

危機管理・救急対応：

危険管理・救急体制・森林ボランテイア保険の準備の他、会として可能な限りの体制を敷いていますが「怪我・事故は、自己責任」です。

緑の募金　一般財団法人 セブン-イレブン 記念財団　SEKISUI HOUSE MATCHING PROGRAM　CAJ Conservation Alliance Japan 一般社団法人 コンサベーション・アライアンス・ジャパン